

みんなのみどり

通 刊 1 2 号

2 0 1 1 . 3 . 1

発行 みどり・山梨

事務所:山梨県甲府市古府中町984-2

(川村方)

電 話 : 0 5 5 - 2 5 2 - 0 2 8 8

F A X : 0 5 5 3 - 3 3 - 7 6 2 0

URL:<http://www.midoriyamanashi.com>

E-mail:kankyo@midoriyamanashi.com

『CO2 温暖化説のウソ 第1章』

窪田 誠

二酸化炭素温暖化説の破綻 ～ 化石燃料を使っていなかった時代 現

在よりもはるかに温暖な気候だった～

現在、日本ばかりでなく世界中の人々の多くが、人間の営みによる二酸化炭素の排出量が増えたために、地球の温暖化が進んでいると信じています。

このような考えに疑問を呈する人たちもいるわけですが、少数意見としてほとんど取り上げられることはありません。

あたかも、16世紀末の中世に地動説を唱えたガリレオのように...

この二酸化炭素温暖化説は、科学的実証と照らし合わせてみると明らかに矛盾する多くの点が見受けられます。

ここでは、その矛盾点を紹介しながら事実をお伝えしたいと思います。

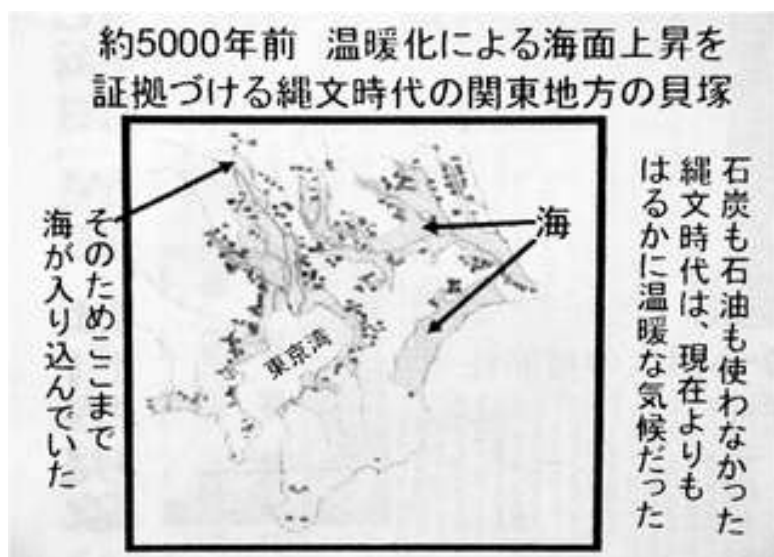
なお、資料として

赤祖父俊一著『正しく知る地球温暖化～誤った地球温暖化論に惑わされないために』と広瀬隆氏の講演を参考とさせていただきました。



まず始めに、考古学の分野からみてみましょう。

よく知られている現象ですが、約 5000 年前に起こった関東地方での縄文海進と呼ばれているものがあります。



上図のように、縄文時代には、東京湾沿いの関東地方は、現在に比べはるか内陸にまで海が入りこんでいました。

石炭も石油も使わなかった縄文時代が、現在よりもはるかに温暖な気候だったことは、この海面上昇により裏付けられています。

現在では冬雪深い場所、青森県で発掘された三内丸山遺跡を思い起こすまでもなく、暖かい時代だったのです。

また、近世の江戸時代になっては、1780 年代に天明の大飢饉が、1830 年代には天保の大飢饉が起きていますから、寒い時代があったこともまた事実です。

ところが、二酸化炭素温暖化説を唱えている IPCC（気候変動に関する政府間パネル）の学者たちが主張している温度変化のデータでは、この当然の事実（寒冷化）が完全に無視され、科学的にも間違った主張がなされているのです。

赤祖父氏によれば、

IPCC は科学者の学会ではなく、その発表内容には、「科学者の一致した意見」という根拠は何もない。気候の研究集団ではなく、「炭酸ガスによる温室効果の研究グループ」にすぎない。つまり地球全体のメカニズムなど知らずに、炭酸ガスによる影響しか、調べたことがない人間たちである。と言い切っています。

赤祖父氏は東北大学理学部地球物理学科を卒業し、大学院在学中の 1958 年にアラスカ大学大学院に入学して博士号を取得。1964 年にはアラスカ大学地球物理研究所教授に就任後、1986～1999 年まで同所長、2000 年から 2007 年まで、アラスカ大学国際北極圏センターの所長をつとめてきた、北極圏における研究の世界的権威です。

2005 年の朝日新聞科学欄に、北極圏で温暖化が進んでいるのは二酸化炭素のためではなく、北大西洋の暖かい海流が流れこんでいるためである、との一文を書き、一昨年 2008 年 8 月 26 日の北海道新聞には “北極圏「異変」は自然現象” と題した、同氏の主張が大きな記事で出ています。



地球は、何度も、氷期による寒冷化と、温暖化を繰り返してきた生きている惑星です。これらの現象は、言うまでもなく 46 億年続いてきた自然現象であって、人間が工業的に二酸化炭素を大量に排出する現代生活とはまったく関係ありません。

現在は、西暦 1400 年から 1800 年頃まで続いた「小氷河期」（地球の寒い時期）が終わり、地球の温度が回復し始めた 1800 年代半ばから今日まで 200 年間も続いている自然な温暖化の時期にあたります。

それゆえ、温暖化というのは、第二次世界大戦直後の 1946 年頃から人類が大量に二酸化炭素を排出し始めたことと無関係に起こっている現象なのです。

また、メディアが取り上げ騒がれている氷河の崩壊は、自然界で何万年も続いてきた現象です。

しかも氷河の後退は、20 世紀に入ってから（大気中の二酸化炭素の濃度が高くなってから）起こったのではなく、どこの氷河でも、それよりはるか前の 19 世紀（1800 年代）以前から進行してきた現象です。

広瀬氏が指摘していますが、

『地球大紀行 6 氷河期襲来』という本が NHK の大型企画として、NHK 出版から出されたのは 1987 年でした。

その 15 ページに下のようにアラスカ、メンデンホール氷河の（実物はカラー）写真が掲載されています。



そして、51 ページには「この氷河が 120～130 年前には現在より 400 ㍎も前進していたが、氷河はその後少しずつ後退してきた」と書かれています。この本が出版された 1987 年の 130 年前は 1857 年です。したがって、石油を全く使わない 19 世紀半ばから氷河の減少は始まっていたことになるのです。

ホッキョクグマの絶滅などとも言われますが、彼らは、地球が今よりずっと暖かい時期を含めて、何十万年も生きてきました。

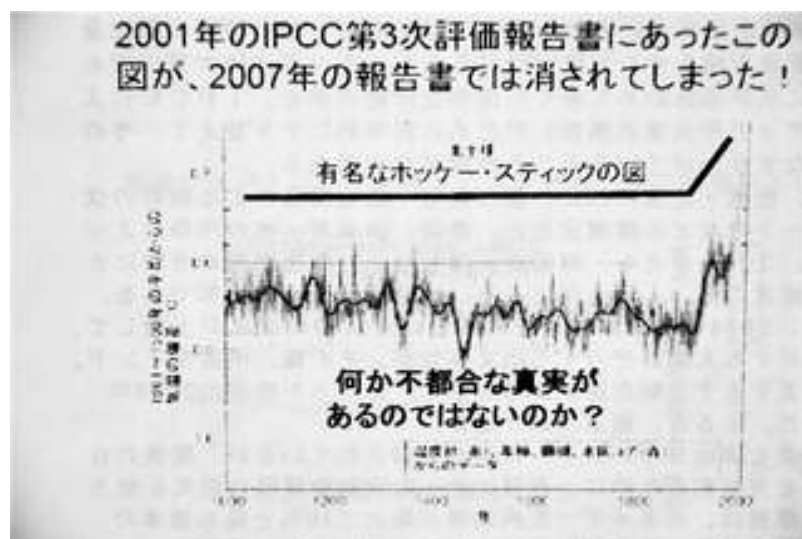
これらの話題は、今まで見ることのできなかつた現象が、最近のメディアの発達により見られるようになった、そのための思い違いでしかないのです。

I P C C 初代議長のパート・ボリンが「2020 年には、ロンドンもニューヨークも水没する」と脅していました。

それがなぜ、2007 年の I P C C 報告書では「100 年後に 18～59 センチの海面上昇」と激減する値を発表するようになったのか、

考えてみる必要があります。18 センチという数字なら全く問題ないものなのです。

さらに驚くのは、I P C C が「地球温暖化は、人為的な二酸化炭素によるものである」と主張する最大の根拠になってきた有名なグラフが、2007 年 11 月 17 日の最新の I P C C 報告書から消えてしまったことです。



赤祖父氏によると、このグラフそのものがデータを間違えていた、つまり、ヨーロッパや日本を襲った世界的な寒冷期がそのグラフに反映されていないため、現在の温暖化が始まった時期がほぼ 200 年～150 年前であるのに、20 世紀（100 年前）からだ間違えてきたわけです。

さらには、昨年秋に発覚した電子メールの流出。

I P C C による温暖化データの捏造事件もあります（前記 CO2 温暖化説のウソ：序説参照）このような、粗雑なデータ・不法な情報操作から発せられた温暖化説、信用するのですか？

（参考資料：広瀬隆氏より拝借しました）

以上 第2章に続く

グリーンレター ⑥

つぶやき

窪田 美恵子

数か月前からウォーキングをしている。車で通り過ぎていた通りを歩いていると、思わぬ発見ができ、普段いかに多くの物を見過ごしてきたかに気づかされる。

歩いているといろいろな事を考える。たとえば、人間はどこまで「スピード」「便利さ」「経済発展」を追求していくのだろうか等々……。

難しいことはよく解らないが「リニア」はどうなの？東京一名古屋間を40分で走る、というこの事の中にどれほどの価値があるのだろうか。

人が交通機関を利用するのには様々な理由がある。「ビジネス」「個人的な用事」「旅行」等々。「ビジネス」「個人的な用事」という点では便利だと思う人もいるかも知れない。(多分、東京・名古屋近辺に住んでいる人には。)

でも、旅行という楽しみの点ではどうだろうか？窓の外の景色を楽しむことはできるの？乗り心地はどうなの？ルートの作り方に無理があるようだし、安全に走れるの？途中駅を作るようだけど降りる人はいるの？果して安全に止まれるの？ルート周辺の環境はどうなるの？周辺住民への影響はないの？大きなムダはないの？

疑問はグルグル頭の中でまわり、増々不安になってしまう。

経済発展の名のもと、これまで人間は多くのものを造ってきたが、本当に必要なものはどれ程あったのだろうか？と思うのは私だけであろうか。

アナクロ人間で、未だパソコンも使えない。「ipad」なる便利そうな物が人気のようだ。何でもござれ、本の代わりまでしてくれるようである。規制緩和の恩恵で何でもありの経済活動は止まる事を知らない。他人のテリトリーに平気で土足で踏み込む。結果、日本社会には無残な状況が続いている。

経済を勉強した事はないので、大層な事は言えないが、江戸時代の日本には「三方良し」というビジネス理念があった、と新聞で読んだ事がある。

それは住み分け。自分の商売も大切にする一方で、他人の商売も尊重する。そして、お客のために商売をする。この三方のバランスを計りながら経済活動が為されてきたようだ。

つまり経済活動は節度を弁えて行なわれていたようで、そこには多大な知恵が駆使されていたに違いない。

勿論、全てがそうであったかは解らないが……。

「経済活動」「便利さ」を追求し、私達は走り続け、更にその加速度を上げているように思える。

人間にとって本当に大事なものは何か？

本当に必要なものは何か？歩く速度で周囲に目を向け、自分の頭でよく考えて見る時に来ているのではないか。

これを書いている最中、偶然にも新聞で見つけた記事にこんな件があった。

思想家、吉本隆明さんのインタビューに関しての記者後記に、「今も様々なことを考えている」という86歳の吉本さんの姿に、夏目漱石が芥川龍之介に寄せたこんな言葉を思いました。「牛になる事はどうしても必要です。われわれはとかく馬になりたがるが、牛にはなかなか切れないです。」

漱石さんは今の日本人を見て、再びこう言うだろうか……。

とことん市民・野沢今朝幸の笛吹市議会レポート

主な議会活動

平成 22 年 12 月定例議会（12/3～12/14）

◎一般質問

9月の定例議会において、私も含め多くの議員が反対したが、「多機能アリーナ」建設関連予算（基本設計料約千七百万円）が可決された。「市民の声を届ける会（代表・佐藤惺恵）」は、議会のこの議決は市民の意向に反するものとして、「多機能アリーナ」建設反対署名運動を展開し、実に21000人にのぼる署名を集めた（有権者約57000）。

「多機能アリーナ」建設問題は、市側の独断専行と、市民の予想以上の反対の声の大きさを考えると、今後の方向として、すべての市民の意向を反映できる「住民投票」に持ち込んでいくべきであると私は確信し、今回の一般質問では、「住民投票」一本に絞って質問を行った。

多機能アリーナ建設は住民投票に附すべきではないのか。

これをテーマに、

- ①多機能アリーナ建設計画は、市民の理解を得られていると考えているか、また、今後、理解を得られる見通しはあるか。
- ②長野佐久市で実施された「総合文化会館」建設反対にかかわる住民投票に学ぶべき点はないか。
- ③市長は、「多機能アリーナ」建設計画を住民投票に委ねる考えはないか。

この質問に対し、市当局の答弁は、まず市民の理解という点ではまだ不十分であることを認め、今後、広報やホームページを通じ、市民の理解が得られるよう努めていくとした。そして、理解が不十分なのは、「多機能アリーナ」に関して具体的な内容の説明が不足していたがためであるということであるが、実際のところ、市民が理解を示さないのは、「多機能アリーナ」そのものに対してである。総論に市民は反対しているのに、市当局は各論に逃げ込もうとしているのである。（後日談であるが、このように答弁した部長ははっきりと「総論では理解が得られていないが、各論に入っていけば理解が得られると思う」と発言するに及んでいる。普通の人はこの考え方はしないものである。頭のいい部長であるので、本当にそういう考えでいるはずはなく、言い逃れのための詭弁でしかない。

肝心の住民投票の答弁では、「首長を議会の判断重要施策で対立した場合、住民投票は実施されるものと理解しており、実施の必要はない」とした。確かに、佐久市の例では、建設に慎重な市長と建設に積極的な議会とで、対立があった。しかし、住民投票を実施せざるをえなかったのは、六十億円とも七十億円とも言われる総合文化会館の運営に対し、市民の間で

大きく賛否が割れていたからである。(結果は7割の反対で中止。建設用地の取得まで終了していたのが。)

これまで全国で実施されてきた住民投票は、合併の賛否を問う住民投票、原発の誘致を巡る住民投票など、いずれもそこに住む住民の間の大きな意見の対立を背景としている。住民の間に大きな意見の対立がないならば、住民投票などやる必要がそもそもない。やっただって結果は初めから分かっているわけだから。市当局の答弁のように、首長と議会が不一致であろうと、また一致しようとして、そんなことは問題ではない。住民投票で問題なのは、そこに住んでいる住民に将来にわたって多大な影響を与えるような施策・事業に対して、住民の間に大きな意見の対立があるかどうかである。こんな常識的答弁さえ許されないのが、市長と議会の大会派によって歪められた笛吹市政の現実である。

平成 23 年 3 月定例議会 (2/24～3/17)

◎一般質問

先回の12月定例議会の一般質問において、「多機能アリーナ建設は住民投票に附すべきである」として、「住民投票」一本に絞って、市当局を質した。この間、市民の間でも住民投票への関心が高まり、「多機能アリーナ」の建設の賛否は、住民投票をもって決すべしという声が増しに強くなってきている。

そこで改めて、「多機能アリーナ」建設の正当性について多方面から問いただすことによって、市民の賛否の判断材料を提供しようと、以下の質問で市当局を問い質した。

- ① 「多機能アリーナ」建設は、「合併以来の懸案事項」としているが、合併時にどのように合意されるのか、具体的に示して頂きたい。
- ② 6大プロジェクトが実施されても市財政の将来は健全であるとしているが、公共施設の改築改修の経費及び増大する扶助費は正確に参入されているか。
- ③ 「多機能アリーナ」の目的は、1500～2000席を有する集会施設ということにあるが、これだけの座席を使用する集会等を年何回想定しているか、また具体的にはどのような催しか。
- ④ 市長は笛吹市に「多機能アリーナ」が必要であるという説明に、アイメッセでの大きな大会を例に引いているが、なぜ市内に大型の集会施設がなければならないか判然としないので、説明を願いたい。
- ⑤ 市民の間で意見が大きく割れ、市民の将来にかなりの影響を与える「多機能アリーナ」の建設の賛否は、住民投票によって決するのが、市民も納得でき、遺恨も残さないすっきりした方法であると思うが、市長はどう考えるか。

いずれの質問に対しても、市当局の答弁は言い訳のようなものであり、市民がなるほどと納得できるような説明は返ってこなかった。

例えば、前初の質問の「合併以来の懸案事項」に関しては、合併時の「新市建設計画」に、「多機能アリーナ」というような表現はないが、生涯学習施設やスポーツ施設、集会施

設などの整備が唄ってある」と答弁しているが、これなどは言い訳の最たるものである。

市長は、この「新市建設計画」は当時の合併町村長と一時一句を慎重に検討したと、当時の様子を自ら説明しながら、どこにもそんな表現のない「多機能アリーナ」という大型複合施設を勝手に「計画にある」としているのである。

この点が重要なのは、市の実施したアンケートでも 6 割が反対、また市の肝煎りで設置した建設検討委員会でも賛否両論併記で、「多機能アリーナ」建設の正当性が得られなかった市当局が、追い詰められて、この「新市建設計画」にその正当性を求めるに及んでいるからである。

市長がハサミとノリを使って、勝手に張り付け合わせて作ったのが「多機能アリーナ」である、私がカリカチュア的に批判すると、議場から質問の意を伴った含み笑いが少なからず漏れた。

また、住民投票の件に関しても、「市民ミーティングでの市民の意見を伺いながら判断していきたい」と逃げた。ただこれも時間伸ばしに過ぎず、そしてその間に既成事実をつくらうという魂胆であることは見え見えである。ここで言う既成事実は、最大会派の「笛政クラブ」と議長の属する「正鶴会」や公明党をたのみに、「多機能アリーナ」建設の関連予算を定例議会ごとに何度も可決したり、また市の広報で大々的に「多機能アリーナ」キャンペーンを張ることによって果されるものである。実際、市当局はこの間そのように一生懸命に取り組んできている。

その効果は、「多機能アリーナ建設は決まってしまう」という感覚を多くの市民が持つようになることによって、建設反対運動が無力感と諦めのなかで、沈静化していくところに現れる。

ところが、今議会とほぼ並行して実施された市のミーティング（市内 7 か所）では、住民投票実施の声が非常に強く、市政当局の既成事実づくり、むしろ裏目に出て、火（住民投票）に油を注いでいる格好になってきている。

住民投票拒否の市長の最後の砦は「議会制民主主義」である。市長は、「議会制民主主義」を基本とする自治体行政にあつて、「住民投票」は議会をないがしろにするもの、という認識をもっている。そのようにしか取れない発言を議会でも、また市民ミーティングでも繰り返している。「議会制民主主義」とは、直接民主制の便宜的手段でしかないという、政治学のイロハさえ、市長にはわかっていない。何よりも、現下の議会を構成する議員は市民の直接選挙によって選ばれる。市民を代表するものとして議員は指定されている。だから、代表していないという事態が発生すれば、リコールという事態が法律で国民（市民）には保障されているのである。笛吹市における「多機能アリーナ」建設をめぐる非生産的な迷乱を解決するには、もはや民主主義の原点にもどって、市民の直接民主主義による「住民投票」しかない。

それを荻野市長が、「議会制民主主義」の名のもとに拒もうとするなら荻野市長に対するリコール運動へと、「多機能アリーナ」建設反対運動は展開せざるをえない。事実、市民ミーティングでそのような激しい意見が市民の中から発せられた。

コラム

ここでは『現在用語の基礎知識』として最新の意味を紹介いたします。このシリーズ、あくまでブラック・ユーモアですから、ご理解いただけない方はここでお止め下さい。

『現在用語の基礎知識』 (2) か～こ

か【家族】〔名〕①集団の最小・最後のよりどころを指す単位②意見の異なる者を排除するために用いられる最強の表現 個人の自立を妨げる目的で定められ従属的不自由さとひきかえに集団内での平穏が与えられる。その集団が大きくなるにつれ自立した自由人には様々な圧力が加えられる仕組みができあがっている。「世界は一家人類みな兄弟」などを叫ぶ者にとっては従属性が最高の美德とされる。例：世界にとってのアメリカ日本にとっての天皇など

き【共産主義】〔名〕キリスト教に次ぐ世界第二位の教義 資本主義の暴走後に復活するマルクスとエンゲルスの教え 元祖「マニフェスト」とされる『共産党宣言』を信奉する信者たちの教義である。過去には名前ばかりでその思想とは全く正反対のエセ共産主義的国家も存在した。そのため1980年代には対立する資本主義に敗れ過去の遺物扱いを受けたが21世紀に入り復活した。このまま再生できるかは信者たちの柔軟性と過去の誤ったイメージの払拭にかかっている。

く【君主制】〔名〕能力ではなくあくまでも世襲によって統治・統合するための装置 民主制を拒否している国の政治体制 人間の自由・平等をめざすという歴史の流れの中では時代に取り残された制度である。かつては勇気ある人々の犠牲の上で廃止されたてきたが未だに野蛮なこの制度を保持し続けている三流国家も存在する。国王という呼ばれ方が一般的だが東洋では総書記（北朝鮮）天皇（日本）とも呼ばれる者がその頂点に立つ。

け【原子力の】〔形〕（主に）ウラン・プルトニウム由来の 放射性物質のある （事実とは正反対な）エコの 科学者の悪夢が戦争目的のために実現した技術である。本来は持っても使えないところにその最大の意味があったのだが腕のある商人たちはそう望まずこれを応用した「発電所」「小型（劣化ウラン）爆弾」などで大もうけを実現している。その代金はチェルノブイリやイラク・コソボの子供たち・発電所作業員・周辺の住人が命で支払っているがそのローンは数万年先まで請求されている。

こ【公的資金】〔名〕私たちの納めた税金をそれと悟られないよう言い換えた言葉 政治屋・官僚・銀行屋たちの造語 経営に失敗した大企業を合法を装って救うために考え出された用語である。国会議員としては中小企業や個人が支配されている会社から損害を受けても何の影響もないが高額献金を受けている企業が倒産しては優雅な生活が維持できず次の選挙も戦えないのである。個人や中小企業が大口献金をすれば状況が逆転する可能性を秘めている。

[訃報]

昨年12月22日に、会員の岩瀬徹様が交通事故のため亡くなりました。環状道路北部区間の反対運動に参加され、お手伝い下さいました。ご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

旧暦から数えても大変遅くなってしまいましたが、新年おめでとうございます。今回も担当者の不手際で、発行が大幅に遅れてしまいここにお詫びいたします。

昨年から、JR東海が計画しているリニア中央新幹線の話も広く伝えられるようになってきました。

沿線各自治体では、根本的な是非の議論もないまま、大きな夢を運んでくれる乗り物として手放しの歓迎ぶりがみられます。ケチを付けるとしたら、停車駅建設の費用が地元負担だということくらいなようです。

今年は「リニア」を総合的に検討して、経済・環境・健康などのあらゆる面からリスクが大きすぎるという結論を下した私たちにとっては、正念場の年になりそうです。

本当の意味での環境問題を置き去りにして、地球温暖化の冤罪がかかるCO2、そのCO2よりも放射性廃棄物を出し続ける原発が環境によいとす倒錯・・・。

目先の利益ではなく、将来の世代までも見据えた視点で物事を考えていくことが必要ですね。

[追]

今回の福島第一原発の大事故、原発を推進している機関・御用学者たちは、これまで私たちが安全性や耐震性への疑問を何度となく投げかけても、CMやPRセンターを使って流す「絶対に安全」「大地震でも心配ない」という安全神話を繰り返すだけでした。

しかも、何か不都合な事故や不手際があると必ず「問題のない範囲の」あるいは「想定外の」という枕詞をつけ、真相を公表してきませんでした。

この責任は重大で犯罪ですらあります。

非常に残念なことです。今回の大事故は私たちが恐れながらも想定していた最悪の事態につながりそうです。

施設をある程度コントロールし安定あるいは廃炉にさせるための遠い道のりを思うと機が遠くなりそうです。

今後、事故の原因究明が行われることでしょうか、間違いなくいえることは、これは想定外でも天災でもなく紛れもない人災だということです。

(M・K)